

エアゾールスプレー缶の廃棄実態調査

花王生活科学研究所 ○山野 裕、石渡 明美、里 直子
 小屋 えな子、重弘 文子

〔目的〕 エアゾール製品には廃棄方法として「使い切って」と表示されているが、実際には「穴を開けたり」、「中身が残っていたり」さまざまであり、家庭やごみ収集車での事故が起こっている。安全で適切な廃棄のあり方を検討するため、スプレー缶の廃棄について1) 各自治体の指導、2) 消費者の意識実態と3) 収集された缶の実態を調べた。

〔方法〕 1) 全国の人口10万人以上の市、186市の「ごみの出し方一覧表(家庭配布用)」を集め「スプレー缶の出し方」を調べた。

2) 首都圏の主婦125名の意識実態を郵送自記入式調査で調べた。

3) 首都圏の某市で資源ごみとして収集されたスプレー缶377本の廃棄状態を調べた。

〔結果〕 1) 清掃行政の指導は約4割が「資源ごみ」として収集している。「穴開け」指導は約9割だが、穴開け時の注意表示「火気注意・戸外で等」がないものが多い。

2) 消費者実態調査では家庭内の手持ちスプレー缶は約12本。「中身が残った缶をごみに出そうとしたことがある」人は約6割で、理由は「必要なくなった」「効果がない」等である。「中身が残った缶」では約3割が「穴開け」していたが、「中身が残ったままごみとして出した」人も約3割いた。一方「使い切った缶」は約半数が「穴開け」していた。穴開け時に「滑ってきりで手を切った事がある」等「危ないと感じた」人は4割いた。

3) 収集された缶の半数はその市の指導通り「穴開け」されており、1/4は製品の表示通り「使い切って」出されていた。1/4は「中身が残ったまま」出されていた。

清掃行政とメーカーが連携して安全で適切な廃棄のあり方の検討と啓蒙活動が必要である。